



TURN を考えたときの言葉
2016

ARTS
COUNCIL
TOKYO



東京都

T U R N
N O T E

T U R N を考えたときの言葉
2 0 1 6

目次

はじめに 奥山理子	04
TURNについて	08
TURN NOTE	11
著者プロフィール	60

はじめに

東京2020オリンピック・パラリンピックの文化プログラム。一般にはほとんど聞き馴染みはないが、オリンピック憲章にもその実施が謳われているように、その位置づけと役割は決して小さなものではない。この文化プログラムを先導するリーディングプロジェクトの一つとして、平成27年(2015年)度に始動したのが「TURN」である。しかし、当初構想されていたことを思い返してみると、それは、2020年に向けて障害者を対象とした芸術文化活動を促進させ、将来的に多くの健常者と障害者がともに体験することのできる「障害者アートプログラム」の新規構築というものであった。けれども、これからの社会が真に目指すべきは、健常者／障害者という二通りの人間による交わりではなく、一人ひとりが異なる“その人らしさ”に気づく眼差しを持ち、互いを尊重しあうプロセスを築いていける、新しい関係性の創造ではないか。例えるならば、ドットの一粒一粒が異なる色彩を、鮮やかに放ちながら集合し、密度だけでない表情の豊かな解像度によって社会が描かれている、そんな姿だ。

そのためには、人と向き合うための辛抱強い時間と、そこへ向かわせる正直な自分の存在、そしてどちらをも包む寛容な空気感の創出が不可欠である。

モデル事業に先駆けて、日比野克彦、森司、奥山理子が参加したアール・ブリュット美術館4館と日本財団による合同企画展ひとがはじめからもっている力「TURN／陸から海へ」(2014-2015年)の開催をとおして見出した、TURNという言葉が、そのための新たな指標となりうると、胸を高鳴らせた日のことを幾度も思い出す。

そうしてTURNは、趣旨を次のように掲げ、新たな歩みを始めた。

異なる背景や習慣を持った人々が関わり合い、さまざまな「個」の出会いを生み出す「交流」を主軸に据えたアートプロジェクトとして、一人ひとり異なる全ての人に届く新たな文化的体験をつくり出すことを目指しています。

このコンセプトのもとで声をかけたアーティストが、同じく声をかけた福祉施設やフリースクールなどコミュニティ特性の異なる施設(ここでは「施設」を福祉施設に限定せず広義的に使用する)へそれぞれに赴き、施設を利用する人や支援する人たちとの交流を重ねている。

そもそもTURNで考える交流とは、アーティストによる表敬訪問でも、講師となって療育や講座の一端を担うものでもない。出会った者の間に相互作用が起こる瞬間を探しつづけるプロセスだと捉えている。しかし、その関わり方や段階、長期的な目標などを、アーティストと施設、そして私たち伴走者が、つねに呼吸を合わせ、同じ方角を見つめるということが容易ではない。それぞれには固有の環境や背景があり、切実な理由がある。そして、相手への期待や投影が無意識に作用し、互いの間を何かが阻んでいるように感じられたとき、交流するという共同作業に翳りが生じてしまう。

そのため、1年目は言葉ではなく体験を重視した。言葉に彩られた説得ではなく、自ら身を置き、その場所の時間を刻み、話し

たり感じたりする身体を伴う体験から、TURNを探していきいたいと考えたのだ。こうして各地で展開された「交流プログラム」は、第1回目の「TURNフェス」(2016年3月)で一堂に会し、「交流し、体験せよ」との掛け声に応じたアーティストたちが、施設での経験を語り始めてくれた機会となった。

2年目は、早くもTURNにとっても大きな変化がもたらされた。リオデジャネイロ2016オリンピック・パラリンピック競技大会にあわせて、開催国ブラジルで展開した「TURN in BRAZIL」では、言葉の壁が国内とはまた異なるアーティストと施設との関係性を生み、多くの協力者の支えによって新たな相関関係が作り出されることとなった。

東京は、いわゆる「アート×福祉」の取り組みにおいては、国内の中で後発的だった状況もあり、TURNは都内の現場を一から開拓する段階にあったが、翌年度には、一気に地球の反対側にまで、その視野とアクションを広げることになったのだ。

しかしいずれも、方程式や解はない。

だからこそTURNでは、参加している人の固有の背景や切実な理由が、活動内容を見極めて行くうえで多分に作用し、重要な手立てともなっている。2年目を過ごしながら、TURNへ注ぐ可能性や期待だけでなく、葛藤や不安、逡巡、怒りも含めて、さまざまな思いや考えが交錯した。その事実が、まさにTURNを形づくっている熱量に他ならない。

はじめからもっている力を探求し、その人らしさに気づき、個の出会いとして他者と共有する。その過程は言葉に言い表し難いことばかりだと思ってきたが、一人ひとりがTURNする日々は、それぞれの頭の中で巡りに巡り、対話をとおして、協議をとおして、言葉になり始めている。その発せられた言葉を、できる限り発せられたままに記録していく作業を始めることにした。それが本書『TURN NOTE』である。日記が寄せ集まったノートブックのような仕立てにした。もちろん、すべての言葉を掲載できた訳ではない。ごくごく一部である。しかし、目に留めた言葉からまた、その日その場に居合わせた者であれば、考えていたことが思い起こされ咀嚼しようと努めるであろうし、そうでなくても、誘発される思考が、その人の中で意味を与える作業となることを期待している。

毎年、毎年、書き溜めていきたいと考えている。数年経ったときに、TURNを経験した一人ひとりの言葉の蓄積から、見えてくるものがあると信じている。

TURN。この言葉を目にし、声に出してみたとき、何がイメージされるだろうか。

TURNコーディネーター

奥山理子

2017年1月

TURN について

SOCIALLY INCLUSIVE ART PROJECT

T U R N

異なる背景や習慣を持った人々が関わり合い、さまざまな「個」の出会いを生み出す「交流」を主軸に据えたアートプロジェクト。平成27年、東京2020オリンピック・パラリンピックの文化プログラムを先導するリーディングプロジェクトとして始動した。アーティストが、福祉施設やフリースクールなどコミュニティ特性が異なる場所へ赴き、その場所を利用する人や支援する人たちとの交流を重ねる「交流プログラム」を中心に、各地の「交流プログラム」が一堂に会す「TURNフェス」の開催、通年活動の拠点「TURN LAND」をとおして、一人ひとり異なる全ての人に届く新たな文化的体験をつくり出すことを目指している。

監修：日比野克彦（アーティスト、東京藝術大学美術学部長）

プロジェクトディレクター：森司（アーツカウンシル東京事業推進室事業調整課長）

コーディネーター：奥山理子（アーツカウンシル東京／みずのき美術館キュレーター）

主催：東京都、アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）、

特定非営利活動法人 Art's Embrace

TURN 2016

- 2016年 4月 2年目の交流プログラムを開始する
- 5月 「TURN in BRAZIL」サンパウロでの交流プログラム開始（ブラジル・サンパウロ）
- 6月 「TURNセンター（仮称）」第1回構想会議以降、2016年12月まで毎月1～2回実施
- 8-9月 「TURN in BRAZIL」（パソ・インペリアル、ブラジル・リオデジャネイロ）開催
- 10月 帰国報告「TURN in BRAZIL」（国立新美術館、東京）開催
- 11月 日比野克彦が「BIENALSUR ACTIONS」においてTURNのプレゼンテーションを行う（アルゼンチン・ブエノスアイレス）
- 「TURNセンター（仮称）」構想会議にて、日比野克彦が「TURN LAND」構想を提案する
- 2017年 1月 「『TURN』の交流を見る、聞く、語る 中間報告会」において、「TURNセンター」改め「TURN LAND」構想を発表
- 3月 「TURNフェス2」（東京都美術館）開催（予定）

TURNは、日本財団アール・ブリュット美術館合同企画展2014-2015「TURNひとがはじめからもっている力 陸から海へ」（2014～2015年）をきっかけに生まれ、平成27年度に、東京2020オリンピック・パラリンピックの文化プログラムを先導するリーディングプロジェクトとして始動した。

T U R N N O T E

凡 例

本書は、「TURN」における以下の資料（2016年6月～2017年1月）をもとに作成しています。

交流プログラム日報 —— 参加アーティストが、福祉施設等にて交流した際に綴った日報

TURNセンター構想会議 —— 「TURNセンター（仮称）」（現在「TURN LAND」に名称変更）の設立を目指し、2016年6月より全8回行われた構想会議（メンバーは交流プログラムの参加施設やTURN事務局を中心に構成）の議事録

インタビュー —— 「TURN in BRAZIL」を終えて帰国した日比野克彦へのインタビューの文字起こしデータ

TURN in BRAZIL 帰国報告会 —— 10月21日～23日の3日間、国立新美術館（東京）にて開催された「TURN in BRAZIL 帰国報告会～地球の裏側でTURNする～」の文字起こしデータ

本書は、2017年1月31日現在の情報に基づきます。

ハーモニーのメンバーに、言葉や絵などを用いながら、「私とは何か」という問いと向き合ってもらおうと試みた。そして、それぞれが考える「私(島)」を表す素材を集めてほしいとお願いした。それが、「TURNフェス2」で発表するフォリオ(作品集)として仕上がっていく予定。本に盛り込む具体的なコンテンツは検討中だ。でもきっと、私とハーモニーの関係性の中で創造されることだろう。個々人の素材をただ集約するだけではない。ともに見出した間(あわい)の中に、今までにない新しい創造的アプローチというものが存在する。

ジェームズ・ジャック(アーティスト)
交流プログラム日報より

2016. 6. 29

タケシ君と過ごす

夕方、西日がさす部屋で、付き添いのスタッフが1名いたけど、20~30分ほど僕と過ごした。タケシ君がハンモックで揺れている隣で僕がオルガンを弾くと、興味を示してハンモックから降りてきた。タケシ君も鍵盤をバンバンとならした。その「バンバン」をひきついで曲にしたり、またタケシ君が「バンバン」とならしたりするのをしばらく繰り返した。僕はピアノを弾けないけど、鍵盤に指をのせて指が踊るような感覚だった。

森山開次(ダンサー・振付家)
交流プログラム日報より

2016. 7. 9

コラボレーション

久保田さんは「私は、アートのアウトプット方法が下手。悩んでいる」と言う。

アーティストと重度の知的障害のある人の関係をいつも考えている。作品は、やっぱりアーティストのものになってしまう。

僕は、「ここで過ごすとき、どんな表現があるだろうか」といつも頭の片隅では考えているけれど、それを目的として過ごしてはいない」と今の考えを話した。

でも、タケシ君との関係性を例にすると、やはり「コラボレーション」という関係性がいちばん成り立ちやすいのではないかと思う。コラボレーションとは、対等な関係も意味する。成功もあれば失敗もあるかもしれない。でも常に失敗も意味がある。「かみあわなかった」ことにも意味がある。

森山開次(ダンサー・振付家)
交流プログラム日報より

2016. 7. 10

見る存在、見られる存在

利用者の身体、スタッフの身体、両方がおもしろかった。

人間は見る存在であると同時に見られる存在であることをとても感じた。きっと僕はたくさん観察したし、同時に施設の多くの人たちからたくさん観察されていただろう。

森山開次(ダンサー・振付家)
交流プログラム日報より

2016. 7. 12

表現するって

表現するって、結構しんどいことだと思うんですよ。ものを作るとか、演奏するとか、演ずるとか、そういうことは結構しんどいことだと思っていて。ここもそういうことをやりたくて来られる方もいるんですけど、フェードアウトしていく利用者もいます。やっぱりつらくなるんですよ。アルス・ノヴァに来たらなにかやらなきゃというプレッシャーから、来なくなる人もいます。こちらは、やらなきゃいけないとは言いなくても、本人が自分にタスクを課すようなときがあったり。アルス・ノヴァは作業所ではないし、何かやらないとなんとなくそこにいられなくなる、というふうに思う人もいます。

久保田翠（認定NPO法人クリエイティブサポートレッツ理事長）
TURNセンター構想会議より

2016. 7. 29

「正しい方向」はどこなのか

「福祉」の持つあの美しい感じがちょっと分からない。たとえばHIVの方のなかには病気を治したいと思う方もいるけれど、それと寄り添いながら生きていく、と思う生き方もあるかもしれない。でもやっぱり、福祉はどうしても「なおす」というような、正しい方向になるべくその人を持っていくようなところがあります。私はその「正しい方向」はどこなのか、よく分からないのです。

久保田翠（認定NPO法人クリエイティブサポートレッツ理事長）
TURNセンター構想会議より

2016. 7. 29

「いてもいい」という状況

スタッフの人たちが「どんな状態でもいいよ」っていう空気をつくっている場所もありますが、それは結構高度な技術だと思います。おそらく、意識的にそこにいる人たちのことを感じながら「いてもいい」という状況をつくれるように振る舞っていらっしゃるんですね。

山口麻里菜(北澤潤八雲事務所マネージャー)
TURNセンター構想会議より

2016. 7. 29

当たり前を問う

(センター構想において前提としておきたいのは)僕はやっぱり、みんなが個人としていられることや、当たりまえを問うということ。そして人生の選択肢に出会うこと。障害があることによって、経験を積んでこれなかったという部分があって、僕たちが当たりまえにやってきたことが、みんなの中で経験として不足していることもある。僕たちの仕事でそれを補うための活動ができれば。いつもそのことを念頭に置いています。

黒澤英明(社会福祉法人きょうされんリサイクル洗びんセンター総務部長)
TURNセンター構想会議より

2016. 8. 25

施設の外で、「妄想かるた」の大会をやったり、交流をしたりすると、色々な人と出会いがあります。自分が統合失調症の当事者であるという自覚もなく妄想の話がされたり、「今、地下鉄に飛び込もうと思ったんだけど」といった人がミーティングにやってきました。そのなかで当事者／利用者／そうでない人といった垣根がどんどん崩れていく。そうしたときに、すでに福祉制度の支援を受けている利用者も大事だけれど、そうでない人たちのことも考えたいな、といった意識が出てきました。それにうちのメンバーが「音楽をやりたい」といって音楽をやってもどこかで行き詰まってしまう。自己完結になってしまうんですね。外の人たちと絡んでいくことで初めて開かれていく。それで施設の外と内をつなぐ、あるいは外と内の敷居がない時間をつくっていく、そんなことを漠然と考えています。

新澤克憲(ハーモニー施設長)
TURNセンター構想会議より

2016. 8. 25

東京

特に、東京などの大都市には、なにかしらのマイノリティ性みたいなものを持った人たちがたくさんいます。でもそれぞれが必ずしも出会いやすい状況ではないかもしれない。最初から、マイノリティ性を理解し合わなくても、「理解したい」という気持ちで出会う可能性は、地方より都市の方があるんじゃないかと思います。

朝倉景樹(シューレ大学スタッフ)
TURNセンター構想会議より

2016. 8. 25

ブラジル

異なった背景を持った人たちが集まろう、という取り組みに対して「え、ブラジルは既にそうだよ」という印象だったんです。日本の、特に福祉では、同じようなマイノリティの人たちが集まっているほうが生活しやすいだろう、ということで区分されている面もあって、TURNではその区分をもう少し取り払おうという試みとなりました。でも、ブラジルはもともと混ざった状態なんですよ。ですので随分とブラジルから学ぶところがありました。

日比野克彦 (TURN 監修者)
インタビューより

2016. 9. 17

時間を共有する

TURNの目的は、日本の伝統を紹介するものでもないし、福祉や病院の現場でのケアの方法をプレゼンするものでもない。いわゆるアートプログラムであることを、きちんとリオで見せていかないと、と思いました。それでアーティストたちの日誌や言葉をもう一度見返すと、一番大事なのは、ものをつくるのではなく時間を共有すること。それを見せて、共有した時間を振り返るとか、互いの時間を交換するところにTURNの意味があるのではないか、と。

日比野克彦 (TURN 監修者)
インタビューより

2016. 9. 17

人に寄り添う

あまりTURNの解釈を拡大していくと、何でもかんでもTURNになっていっちゃうので、じゃあ、TURNの定義って何だろう、ということをしっかり絞っていかなきゃいけない。けれども、僕が地域でやっている活動にもTURN的な要素もある。いわゆるマイノリティというか、世の中の中心部分から外れたところにアーティストがお邪魔して、そこを再評価・再発見して発信していく。

そうした地域版の芸術祭は、今は日本にたくさんあるけれど、土地に入りながら、より人に入っていくというのが、次のアートのステージとしてあるんじゃないかなと思います。廃屋とか廃校になったところに滞在すれば、土地に寄り添うことになるけれど、人に寄り添うのはそういうわけにはいかなくて、時間をかけながらやっていかなきゃできないと思います。

日比野克彦 (TURN監修者)
インタビューより

2016.9.17

あたりまえを最大限解除

今思えば、なぜそのようなことが起きたのか、それが分からないというもどかしさよりも、自分がその一瞬に反応できなかったという悔しさが残っていることに気が付いた。身体はびっくらこいたのに、その反応を理解しようとする意識が妨げたように思うのだ。分かる / 分からないという二者択一ではない、また別の応えを導き出さなければ、この出来事と向き合うことはできないのではないか。だとしたら、これから正面玄関に足を踏み入れた瞬間から、そこは未知の世界。自分の中のあたりまえを最大限解除しよう。唯一杖にできるものがあるとすれば身体のみ。なんて、既に頭の中は観念的な言葉で溢れそうになりながら、でもわくわくする思いとが渾然とひしめき合う状態で玄関をくぐった。

大西健太郎 (ダンサー)
交流プログラム日報より

2016.9.23

対話の風穴

モヤモヤを持っている人はたくさんいます。そうした多くの人に関わってもらって広がりを持っていかないと、私たちの運動や活動は結構きついです。「ひきこもっている人は贅沢」とか言う人もいますが、そういう人って、結構、社会にモヤモヤを持っていて閉塞感を感じているんじゃないかな。意外と同じ少数派なのかもしれないのに、そうやってバッシングをする人に正論を言っても水掛け論で対話にならないんです。今は分断されている人たちとも、表現を媒介にしたら対話の風穴が開けられるのかもしれない、と思います。

朝倉景樹 (シューレ大学スタッフ)
TURNセンター構想会議より

2016.9.23

幅広い接し方ができる場

利用者が裕福とは限らないので、利用料が高かったり、アクセスにお金がかかる場所だと来られない。それからインターネットやその他の方法で、その場に来られなくても活動に触れることができるとか、幅広い接し方ができる場にしないと、なかなか利用が難しいと思います。利用にお金がかからないのは現実的にとても大事なことではないかと。でも人と人が出会うことのできる場所という意味では、もちろん東京ならではの出会い方もあるでしょうし、別に障害がある・ないに関わらず、いろいろな人がそこで接するチャンスが増えたほうがいいんじゃないかな。いろいろな人が来れば、それなりのリスクや運営上の大変さが出てくるのは、覚悟した上での話です。

朝倉景樹 (シューレ大学スタッフ)
TURNセンター構想会議より

2016.9.23

「福祉」は、社会保障のなかった時代を経て、より良くしようとして法律が変わるたびにサービスがどんどん細分化され、ひたすら変化し続けています。日本で残念なのは、より充実する部分もありながら、結果的にサービス、システム志向になってしまって、人の有機的な動きにあまり馴染まないものになってしまったんじゃないかな、と。制度のなかでは白黒を付けなければいけないために、福祉のサービスを受けるべき人・そうではない人の合間にいる人が、存在しないものとされてしまう、という状態が生じてしまっている感じがします。でも、本来の「福祉」という言葉の大きな意味は、サービスではなく「人がより良く生きていく」ための言葉だと思うので、広義の概念を再認識し、回復させていくような新しいモデルを、TURNを通してつくっていただければいいと思います。

奥山理子 (TURNコーディネーター)
TURNセンター構想会議より

2016. 9. 23

固定されるとしんどい

「人とつながりを考えたい」と思っているアーティストに関わってもらうのがいいんじゃないかと思います。もちろんそういう人じゃなきゃいけないという意味ではありません。私たちのところでも、〇〇障害とか、ひきこもりの〇〇さん、という見方をされると結構つらい、という話はよく出ます。

表現も同じで、〇〇障害の人の表現とか、ひきこもりの人の表現とか、固定されるとしんどい。というかつらい。これは避けたいな、と。それからこれもよく出る話ですけど、無理に褒められるのがつらい、というのもあって。見に来た人は善意で褒めようとしてくださるけれど、無理に褒めてくれているのが伝わってきちゃったり。わからないときは「わかりません」といってくださるほうが傷つかないと思います。

朝倉景樹 (シューレ大学スタッフ)
TURNセンター構想会議より

2016. 9. 23

当事者って誰なんだろうか

「当事者の声を聞く」ということは抜かしてはいけないんだらうな、と思いつつ、でも当事者って誰なんだろう、どこまでが当事者なのかな、というところもあるんだらうなど。当事者に対して何かをするというよりも、そもそも見方が違って、当事者そのものを問うということから、広く皆さんに意見を聞く考えの方がいいのかもしれない。どちらにしてもいろんな方の意見が反映されて、それでセンターが立ち上がっても、継続しているんな方の意見が入りつつ、変化していくような場であってほしいなと思いました。

山田達也(大田区立障がい者総合サポートセンター職員)
TURNセンター構想会議より

2016. 9. 23

食欲と嚥下障害

嚥下障害、高齢者になって飲み込むことが困難になってくると、食は死と隣り合わせの行為になってくる。

しかし最後に残るのも食欲。死の寸前でもビールを飲みたがったり、高齢者も天ぷらをよろこんだり。嚥下障害があるからこそ、昔美味しかったものを食べたくなる。

しかし高齢者になると、危険は排除されていき、例えば家庭でガスを使うことを禁止されたりすることも多い。調理器具を使えないので家では冷たいパンばかりという人もいる、という話をきくと、ちゃんとした昼食をだすことや、嚥下食でもこだわるのが切実に思えてくる。

ちなみに高齢になっていくと、だんだん味覚がなくなっていくそうだが、最後には甘みだけが残るらしい。

EAT & ART TARO(アーティスト)
交流プログラム日報より

2016. 10. 5

お酒の話をいろいろ聞いたが、もちろん医者からお酒を止められている人も多い。

しかし梅のジュースを、スタッフが「お酒ですよ」「ちょっと今日は正月だから特別。他の人には絶対内緒で」とかいうと酔っ払う高齢者もいるらしい。

スタッフとの信頼関係が味を変え、ジュースをアルコールに変えてしまう。

嚙下食もそのコントロールが大事、嚙下食だが元の形に似せて形成し直す食品もあるそうで、形によって、元の記憶と照らし合わせられ美味しいと感じるのだろう。

美味しいものの求め方が、美味しいと思うロジックが少し変わってくるのかもしれない。

きあんぼん

中山さんの執筆している手作りの本。

ペンネームは中山泉石。

L判の写真アルバムで作ってある。

文字がぎっしり(字も良い)

きあんぼん=気安本=気持ちが安定する本

“この本は自分で思ったり考えたり経験してキロクした
この本をライフワークにして人も自分もよくなる”

不安になったときに、

以前に教わったことや悟ったことを読み返して、
自分を取り戻すために書きつけてあるものだと思う。

あんまりにも素直に書いてある。

感動していたら、一冊くださった。

写真がとてもいい。
食べたものや、自宅の様子、窓からの景色、職場の仲間
など、丁寧に撮ってある写真。
ご本人は、物静かでやわらかいかんじの方だった。
質問すると、ゆっくり、写っているものについて教えて
くれた。
大事なものを写真におさめている姿勢にはっとした。

川瀬一絵(フォトグラファー)
交流プログラム日報より

2016.10.7

TURNらしい

私たちは表現とアートが欠かせないものだと思っている
という前提がとても重要なんじゃないかなと思いました。
クリエイティブサポートレッツの久保田翠さんは、「表現
することは実は難しいことで、意図せず他者に強いてし
まう可能性もある」とおっしゃっていたと思います。
一方で新澤さんは「そこに“居る”ということ自体のな
かから私たちが表現であるから見出すこともできるよね」
とおっしゃっていました。ともにつくっていく、つくる
ことでつながっていく。アートによって普段できないこ
とができること、あるいはアートだからこそひろく遠く
に届けることができる。そういったところを「TURNらし
い」と言っていきたいと思っています。

奥山理子(TURNコーディネーター)
TURNセンター構想会議より

2016.10.13

学 校

TURNが学校になったらいいな、と。知りたいことや学びたいこと、正解がない世界を学べる場所としての学校です。失敗が学べる社会科とか、障害のある人が先生になっている図工科とか。施設や実際の仕事場で、つくることをサポートしたいけれど技術がないなら、その技法を学べるような技術科とか。多様な進路相談もできるといい、といった「TURNセンター」のイメージを話し合いました。

山口麻里菜(北澤潤八雲事務所マネージャー)
TURNセンター構想会議より

2016. 10. 13

日頃会わない人たちが出会う場として

2016年の3月に「TURNフェス」をやったとき、それぞれの事業所や施設が、普段は会わない人たちと会ってそれぞれが学ぶことができたし、次につながるきっかけもできました。そういう人間関係をつくり出せるような機能が「TURNセンター」にあるといい。やはり日頃会わない人たちが出会う場としての「TURNセンター」になるといいと思う。

日比野克彦(TURN監修者)
インタビューより

2016. 10. 13

テーブルの上には、マーカー、油性ペン、パステルに色鉛筆、クレヨンなどが一面に広がっている。

「荷物はこちに置いていいですよ」。

ぎこちなく動く私に気を遣ってくれたのは、Nさん。

「ここに座っていいですよ」。

つづいて、Iさんが合の手で流れを作ってくれた。

「空気を壊さないように」なんてつもりが愚かな意識よ。他所者の私は、むしろ周りの圧倒的な大らかさでいさせてもらっていることにやっと気が付いた。

みなそれぞれに絵を描いている。本当にそれぞれの仕事をそれぞれにやっている。すごいな。次から次へと、描くものが尽きない。どれも、思わず見入ってしまうほど、こちらの好奇心を煽ってくる制作ばかりだ。こうなったらこちらも負けていられない(?) 何の対抗意識か分からないが、そう思って、自分も好きなイラストを描くことにした。

その後、何も話さず、時間いっぱいまで描画作業に集中した。

大西健太郎(ダンサー)
交流プログラム日報より

2016.10.13

TURNを探す

TURNというプロジェクトは、「TURNを探そう」といったところがどこかにあるので、ゴールがあるようでない。アーティストにとっては、何かをつくったら完成する場合があります。サンパウロでも、「完成しました」と言われるんだけど「今からじゃないですか」と思うような意識のずれもありました。完成しているのでそれは間違いじゃないんです。でも、私たちがTURNに託しているのはそこではないことを、丁寧に話をしていきました。

森司(TURNプロジェクトディレクター)
TURN in BRAZIL 帰国報告会より

2016.10.21

新しいアートの姿に

アートは価値を変換してくれる力がある。アーティストは、世の中に埋もれていたり、気づかれなかったりするものを見つけ、「これが魅力的だよ」と見つける力がある。アーティストが、マイノリティと言われるコミュニティに通うことで、今まで見えていなかった可能性や価値を見つける。それが社会のいろいろな問題を発見したり、解決へ導くきっかけになったり。それがTURNの一番大きな目的だと思うんです。

TURNは、福祉のいろいろな人たちとも一緒にやっているけれど、僕はやっぱりこれはアートプロジェクトであることはずらさずに、きちんとアートが、社会の中で役割を果たせる姿を実践しながら、本来持っている力はまだまだいろいろあるということ、TURNのなかで見せられれば、と思っています。

日比野克彦 (TURN監修者)
TURN in BRAZIL 帰国報告会より

2016. 10. 21

糸と向き合うときと同じように

240本の糸を1束25メートルの紐にするため、最後の方は時間がなくて、あせってグイグイと引っ張っていたんです。それで強く引いていたら、糸がどんどん硬くなって、指を切ってしまいました。「俺、ブラジルまで来て何してんだろうな」と思って。それで半ばあきらめながら、少し穏やかな気持ちで糸に触れたら、糸が自然とそろって、きれいにまとまって。そのときが、僕のなかで結構TURNした瞬間でした。「これってサンパウロの自閉症児療育施設PIPAの子どもたちともよく似ているな」とはっとして。糸は、その日の天候や湿度、光によって伸びたり縮んだり、小さな変化があります。PIPAの子どもたちと毎朝一緒に走っていたときによく見ていると、確実に何か変化しているのがわかりました。糸と向き合うときと同じように、自分がどういう心持ちで彼らと向き合うか。いらいらして向き合うと彼らも興奮するし、落ちついて向き合うと落ちついて甘えたりもする。自分を写す鏡のような、と。糸も彼らの存在も、だんだん重なって見えてきて。

五十嵐靖晃 (アーティスト)
TURN in BRAZIL 帰国報告会より

2016. 10. 22

その翌日の朝、PIPAの子と走りながら思っていたのは、これです。

「人の心は変化する。人の数だけ世界があるのではなく、人の心の数だけ世界がある。心が変わることで、世界の捉え方が変わり、そして世界も変わっていくのだらう。きょう、自分がとらえるこの世界は少し変わったような気がした」。

どう向き合うかで、世界のとらえ方は変わっていくんだなと思いました。世界との向き合い方は、糸との向き合い方や、PIPAのこどもと向き合うのと同じではないか、と気づいた朝、いつものようにみんなと一緒に走ったときに、世界が違って見えたんです。一見変わらない世界も、とらえ方が変わることで少しずつ変わっていく可能性があるんじゃないかなというのを、糸やPIPAの自閉症のこどもたちから学びました。

五十嵐靖晃(アーティスト)
TURN in BRAZIL 帰国報告会より

2016. 10. 22

チャンネルを合わせるような感じで

彼らと接するとき、自分たちのルールや感覚などの固定観念で、無理に押し通そうとするとうまくいかないことのほうが多いです。そういったときに一歩引くというか、チャンネルを合わせるような感じで、少しずつ変えていくとどこか合うところがあります。五十嵐さんが言っていたような感覚を実際に体感することがあります。

高野賢二(クラフト工房 La Mano 施設長)
TURN in BRAZIL 帰国報告会より

2016. 10. 22

新しい形のプラットフォーム

TURNは、日比野克彦さんというアーティストの「アート・プログラム」であると同時に、日比野さん以外のアーティストやその他の多様な人たちが参画できる「プラットフォーム」でもあるという、二重の構造を持っています。この「プラットフォーム」としての役割が特に重要です。これから始まっていくオリンピック文化プログラムにおいてプラットフォームは、多様な人たちが、単なる鑑賞者や消費者としてではなく、アートに関与できる仕掛けとなるのではないかと、そしてさらに現在の日本の文化を海外に紹介していくときに有効に機能するのではないかと考えています。

太下義之（三菱UFJリサーチ & コンサルティング芸術・文化政策センター 主席研究員／センター長）
TURN in BRAZIL 帰国報告会より

2016. 10. 22

拡張する芸術の役割

TURNというのは、異なる立場の人たちが時間や経験を共有するわけです。そして真ん中にある伝統文化や芸術、ワークショップ、作品や展示が経験や記憶となって残っていく。最後にそれぞれの立場の人の中に、その経験が返っていき、それがそれぞれの中で発酵して「人がはじめから持っている力」に気づいたり、目覚めていったり、というのがTURNのモデルというか、TURNの社会的な位置づけというか、そういう感じがして図解にしてみました。

この「TURNモデル・BRAZIL」の次に、また別のモデルもできるかもしれません。ですが、社会における芸術の役割や位置づけが今ほど拡張している時代はないと思うので、そのことがどういう意味を持つのかということ、これからちゃんと整理していくのは意味があるかな、と思っています。

吉本光宏（ニッセイ基礎研究所研究理事）
TURN in BRAZIL 帰国報告会より

2016. 10. 22

社会の基盤をつくりかえる力

TURNの目指すところは、単なるアートプロジェクトでもないし、福祉の次世代型でもない。社会の基盤をよみかえるというか、つくりかえる力がTURNにはあるし、そこまで持っていきたいと思うんです。

日比野克彦 (TURN監修者)
TURN in BRAZIL 帰国報告会より

2016. 10. 22

12歳のときに TURNしていたのかもしれない

私は12歳から、「みずのき」という入所施設に出入りしていたのですが、すれ違う人が、利用者である重い知的障害の人か、職員しかいなかったんです。こんなにすてきな場所なのに、こんなにいろんな時間があって、景色もいいし、気持ちいいのに、どうしてほかの人はいないんだろう、と子ども心に強烈な違和感を感じました。そうした状況を変えたい、と思って今の活動に至っているので、そういうところはすごく大事にしたい。きっと12歳のときにTURNしたのかもしれないと、さっき、糸を巻きながらふと思いました。

奥山理子 (TURNコーディネーター)
TURN in BRAZIL 帰国報告会より

2016. 10. 22

身体が感知している強烈な現実 打ちのめされる

小茂根福祉園から帰ると、何とも言えない疲労感がたまっている（その感覚は、ものすごい重要なことだと思っているので、「疲労感」という言葉だけに集約できないのだが）。Kさんのような例にしばしば出くわすことがあるのだが、それらは、何かあまりに強烈な存在感や気配に触れたことで、身体がショックを受けたような感じなのだ。理屈（頭で考えることや理解するという作業）では追いつかない、何か身体が感知している強烈な現実
打ちのめされることがある。

大西健太郎（ダンサー）
交流プログラム日報より

2016.11.14

例えば、就労では、しばしばこんな風景を目にする。

みんなが集まって何かをする時間（ミーティングなど）、いつもの時間より少し遅れていたとする。すると、しきりに時計を指差し声を張り上げる人、作業場を落ち着かない様子で歩き出す人が出てくる。利用者さんによっては「いつもとちがう」ということに不安や違和感を覚える人は少なくない。こんな場面では、一見してその行動の意図や意味が読み込めないことがある。そこへ、職員のみなさんは、何か一言投げかける。

本人に対しても、みんなに対しても。それも、とても穏やかな雰囲気、何気なくやってくれる。それが合いの手だ。その一言で、本人もみんなも落ち着きを取り戻す。

いつもとちがうこと、動揺がおこること、不安を感じること……。それらは、みな感覚的で感情に直結すること。

目には見えない、捉え難いこと。それを言葉やかかけ声にして表へ現すことで、みんなが状況を確認できる。「合いの手」は、職員の方に限った役回りではない。利用者さんの中にも、その役をやっている人がいる。

「だいじょうぶ?」「そうこなくっちゃ」「怒らないで」など、状況を見ながら、敏感にその場に向けた言葉やかかけ声を投げかける人がいる。

また、こんなふうに言い換えて説明することもできる。コミュニケーションが1対1にはならず、必ず誰かが間に挟まっている。小茂根福祉園では、会話が円を描くようになされているみたいだ。

大西健太郎（ダンサー）
交流プログラム日報より

2016.11.18

ワークショップは大成功でした。

昼食時の盛り上がりがすごいです。みんな楽しそう。仕事と休憩のメリハリがつく利用者にはとても楽しい時間です。興奮しすぎて、落ち着かなくなる人はこちら支援側でケアしています。煩いと思って移動出来る人は、それでいいと思っています。

ワークショップは大成功でした。私は2階の職員になり4年目になりますが、利用者さんの思わぬ動きに驚きました。

みんなの可動域（特に年配者）、動きの発想、突然のことなのに受け入れる力、仕事なのにオンオフの入れ方、びっくりさせられました。意外にみんな何かを身にまったり、自由に動く、スポットがあたるのが好きなんですね^^

高田紀子（小茂根福祉園生活支援員）
交流プログラム日報より

2016.11.28

両義性

こども食堂を開いている近藤さんと「こども食堂とは何か」というお話を

していたのですが

「こどもの居場所を作ると言うけど、

その場を作る大人の居場所ができることでもあって、

その人も過ごせてるんでしょ～！」

という彼女の言葉

非常に解りやすかったです。

要するに、誰かが何かをととても必要としていて、

それを感じている人間が、自分にできることをするかどうかということ。

そしてそこには両義性があるということ。

永岡大輔（アーティスト）
交流プログラム日報より

2016.12.1

満月の夜だけ海から浮上してくる 陸(ランド)のように

僕らのやり方は、とても時間のかかるのんびりしたやり方。だから、そんな急激な変化は大変。けれども、利用者の人たちにとって、外から人が来て、その人たちと一緒にモノをつくることは大丈夫です。ただ、すごく非効率的なやり方をすると思うので、信頼関係の結べる人と、せかされることなく出来るのだったら、ハーモニーは「TURN LAND」の何かの部分は担えるのかなという話はしています。常には難しいけれど、満月の夜だけ海から浮上してくるような陸(ランド)ならば大丈夫だと思います。

コミュニケーションにまつわるキーワード

小茂根福祉園に来て思う、

コミュニケーションの仕方にまつわる(個人的)キーワード:

- 1対1にならない。必ず誰かが助けてくれる。
(つまり、三者以上の関係になる?!)
- 相手を「理解」しようとする歩み寄れない。
(「自然体」になれない。
そして「フレンドリーさ」も欠く気がする……)

大西健太郎(ダンサー)
交流プログラム日報より

2016.12.12

新澤克憲(ハーモニー施設長)
TURNセンター構想会議より

2016.12.19

TURN LAND

「センター」って、どうしても建物的なイメージがあるので、それよりも「LAND(ランド)」っていうほうが、出たり入ったりするエリア的なイメージ。島に上陸して、また誰かが船に乗って出かけて行く。つまりいろんな人がそこに入りししながらも、一つのエリアの中にある空気感をつくる。「LAND」はそんなイメージを持っています。

日比野克彦(TURN監修者)
TURNセンター構想会議より

2016. 12. 19

施設のリアリティを伝えたい

社会で最も重要な役割を担っている一つに、福祉施設があると思います。福祉の仕事をする人たちとこの「TURN LAND」の構想を話すことで初めて「アーティストによってだけしか、世界がひらかれていくのではないよね」と福祉を担う人たちが、自分たちの分野も人生の中で不可欠なものだと伝える気概というか、魅力的なものを持ち合わせていると感じ、このLAND構想を進めていけるといいなと思います。

施設のリアリティをできるだけありありと伝えたいというのは、きっと皆さんと共通している想いです。でも、それを福祉事業としてではなく文化事業として行うのは、私にとっても初の試みです。施設のなかに、ケアをしたり、されたり、という関係ではない人もいる状態がTURNとしての希望になっていくと考えたときに、実際にその状況をつくり出せるのは、通常の施設運営とは異なる時間帯なのかもしれません。

奥山理子(TURNコーディネーター)
TURNセンター構想会議より

2016. 12. 19

スタッフにとって

スタッフ同士だとなかなか話せないこともある。でも、施設のことを何も知らないアーティストという立場から、普段の仕事内容や、施設についての単純な質問をすると、何かカーッと溜まっていたものが、ポロッと一瞬はがれるような、そんな話も施設の滞在中に聞きました。それもきっと TURN の一つの役割です。

施設のスタッフにとって、TURN や「TURN LAND」のプログラムでアーティストと交流するなかで、たとえば「自分たちのことを求めている人たちがいるんだな」という喜びや、仕事仲間には言えないようなこと、言わないことを話せる機会になるのもいいなと思います。

日比野克彦 (TURN 監修者)
TURN センター 構想会議より

2016. 12. 19

出 会 い 方

働く場所とのマッチングは、書類選考の時点で「障害」で切られちゃうこともあります。でも書類上の情報ではなく、「君は良い人だから働きの来なさい」といったマッチングも時にはある話です。能力や適性とか客観的な指標でなくて、そういう「私」を起点とした出会い方は絶対に面白いですね。

お互い一緒にやっ払いこうという気持ちが先にあって、この人と何ができるか考えるというのは、ものすごく創造的でスリリングな活動だと思うんです。

新澤克憲 (ハーモニー 施設長)
TURN センター 構想会議より

2016. 12. 19

TURNはアーティストの仕事なのか？

昨年11月、日比野さんとブエノスアイレスへTURNのプレゼンテーションに出向きました。

その折に面会した、美術作家のクリスチャン・ボルタンスキー氏から以下のような言葉を投げかけられました。

「TURNのことはよく分かりました。すばらしいと思います。しかし、それはアーティストの仕事でしょうか。精神科医やセラピストの仕事ではありませんか？」

とてもシンプルで重要な質問に、そのときは、ただ受け止めるほかありませんでした。

今、私たちは、これを「アーティストの仕事であり、アートである」と、プロジェクトをとおして表明しつづけていきたいと、意を新たにしております。

奥山理子 (TURNコーディネーター)
メールより

2017.1.4

著者プロフィール

朝倉景樹 (あさくら・かげき)

シュレ大学のスタッフ。引きこもり・不登校など、生きづらさを抱える若者の学びの活動支援を行っている。シュレ大学は2015年度からTURNに参加し、アーティストの今井さつきとの交流を重ねている。

川瀬一絵 (かわせ・かずえ)

TURN参加アーティスト。フォトグラファー。2015年度から社会福祉法人きょうされんリサイクル洗びんセンターへの訪問を重ね、障害のある人の働く姿や日常と向き合っている。

EAT & ART TARO

TURN参加アーティスト。食をテーマにしたアートプロジェクトを全国各地で展開。TURNでは、知的障害者を対象とした料理教室、手話が公用語のカフェ、介護事業所が運営する定食屋などへのリサーチを重ねている。

久保田翠 (くぼた・みどり)

認定NPO法人クリエイティブサポートレッツ理事長。2015年度はアーティストの中崎透とともにTURNフェスに参加し、2016年度はTURNセンター構想会議に出席している。

五十嵐靖晃 (いがらし・やすあき)

TURN参加アーティスト。2015年度よりクラフト工房 La Manoとの交流に加え、2016年度は「TURN in BRAZIL」に参加し、サンパウロの自閉症児療育施設PIPAとの交流を行った。

黒澤英明 (くろさわ・ひであき)

びんの洗浄作業を中心とした障害者の就労支援を行う社会福祉法人きょうされんリサイクル洗びんセンター総務部長。2015年度からTURNに参加し、フォトグラファーの池田晶紀、川瀬一絵との交流を担当。

太下義之 (おおした・よしゆき)

三菱UFJリサーチ&コンサルティング芸術・文化政策センター主席研究員/センター長。「TURN in RIO」カンファレンス、「TURN in BRAZIL 帰国報告会」に登壇。

James Jack (ジェームズ・ジャック)

TURN参加アーティスト。社会やエコロジーと深く関わるプロジェクトを展開。TURNでは、2015年度からハーモニーとの交流を重ねている。

大西健太郎 (おおにし・けんたろう)

TURN参加アーティスト。ダンサー。2015年度に富塚絵美とともにTURNフェスに参加。2016年度は、参加アーティストとして板橋区立小茂根福祉園との交流を重ねている。

新澤克憲 (しんざわ・かつのり)

ハーモニー施設長。統合失調症など、心の病をもちながら暮らしている人が思い思いに過ごせる施設として運営。2015年度からTURNに参加し、James JackとSam Stockerとの交流を重ねている。

高田紀子 (たかだ・のりこ)

小茂根福祉園生活支援員。知的障害のある人の生活介護と就労支援を行う。2015年度よりTURNに参加し、現在はアーティストの大西健太郎の交流を担当している。

山田達也 (やまだ・たつや)

大田区立障がい者総合サポートセンター職員。障害者の就労支援の一環として、一般就労した人たちが週に一度集まる「たまりば」を開催し、2015年度よりアーティストの角銅真実が交流を行っている。

高野賢二 (たかの・けんじ)

クラフト工房 La Mano施設長。築90年の民家で、障害のある人となない人が共にものづくりに取り組む工房を運営。2015年度よりTURNに参加し、交流プログラムやセンター構想会議に携わる。

吉本光宏 (よしもと・みつひろ)

ニッセイ基礎研究所研究理事。「TURN in RIO」カンファレンス、「TURN in BRAZIL 帰国報告会」に登壇。

永岡大輔 (ながおか・だいすけ)

TURN参加アーティスト。記憶と身体との関係性を見つめながら、ドローイングや映像作品を制作している。2016年度より、こども食堂を主宰する大田区の3つの団体から生まれた「こども会議」で交流を始める。

日比野克彦 (ひびの・かつひこ)

TURN監修者。アーティスト、東京藝術大学美術学部長・美術学部先端芸術表現科教授。

森山開次 (もりやま・かいじ)

TURN参加アーティスト。ダンサー・振付家。2016年度よりTURNに参加し、複数の障害者支援施設を訪問し、それぞれの施設とのダンスをとおした交流を経験。

森司 (もり・つかさ)

TURN プロジェクトディレクター。アーツカウンシル東京事業推進室事業調整課長。

山口麻里菜 (やまぐち・まりな)

北澤潤八雲事務所マネージャー。病院、学校、団地などでアートプロジェクトを展開。未就学児の療育や特別支援教育に関わった経験から、TURNセンター構想会議運営メンバーとして参加。

奥山理子 (おくやま・りこ)

TURNコーディネーター。事業計画や交流プログラムのコーディネートを行っている。障害者支援を行う社会福祉法人松花苑が運営するみずのき美術館のキュレーターとしても活動。

TURN NOTE

「TURN」を考えたときの言葉 2016

平成29年3月1日

監修：森司（アーツカウンシル東京 TURNプロジェクトディレクター）

編集：佐藤恵美、奥山理子（アーツカウンシル東京 TURNコーディネーター）

編集協力：アーツカウンシル東京 [浅野五月、古屋梨奈、畑まりあ]、
特定非営利活動法人Art's Embrace [清野愛流、天羽絵莉子、岩中可南子]

デザイン：星野哲也

翻訳：株式会社オフィス宮崎

印刷：株式会社山田写真製版所

発行：アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）

〒102-0073 東京都千代田区九段北4-1-28 九段ファーストプレイス 8階

Tel: 03-6256-8435 / Fax: 03-6256-8829

Email: turn-project@artscouncil-tokyo.jp

URL: www.artscouncil-tokyo.jp

TURN公式ウェブサイト: <http://turn-project.com/>

©2017 Arts Council Tokyo

Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture

All rights reserved